

マグダラのマリア図像におけるオイルランプの象徴的意味について

秋元 優季 (日本大学)

西欧の17世紀前半、カラヴァッジョに端を発する、光が絵画作品にもたらす効果への関心がきっかけとなり、画面に人工照明を描いた夜景画が流行し、様々な様式展開を見せる。夜の場面に描かれた人工照明は、作品のなかで光源としての実用的な役割を果たしていることは無論である。一方でそれらを単なる光源として捉えるだけではなく、図像学的視点から蠟燭やランプの意味内容を解明しようとする研究も行われている。本発表では、蠟燭と比べると登場する頻度は少ないものの、特定の主題に描かれる傾向があるオイルランプに注目し、主題との関係においてその意味を探ることを試みる。

オイルランプが描かれた作例の代表的なものに、ジョルジュ・ド・ラ・トゥール (1593-1652) による《灯火のマグダラのマリア》(1640年代)がある。この作品に描かれた光源の意味内容に関する先行研究では、多義的なランプの意味を提示するにとどまり、先行する図像との相対的分析が行われていない(1996, CHONÉ)。ラ・トゥールの作品は決して創意的なものではなく、その多くは先行する構図の踏襲であることはよく知られている。マグダラのマリアにオイルランプを組み合わせた事例もラ・トゥールに限られたことではないが、先行図像の分析と、それらとの表現の相違が見過ざれている。

マグダラのマリアにオイルランプを組み合わせた図像を遡ると、フランドルの版画家、ラファエル・サーデレル (1560,61-1628,32) により制作された何点かの版画にたどり着く。サーデレルの版画では特に、隠遁聖人図像とランプの組み合わせが多数みられ、マグダラのマリアもその中に含まれる。広く伝播した可能性を有する版画作品とそこに書き込まれた銘文は、オイルランプが宗教的意味を担い特定の聖人図像と結びついていたことを示している。また、同時代の寓意図像集も多くの手がかりを与えてくれる。その一例として、リーパの『イコノロギア』(1603)では「英知(SAPIENZA)」のアトリビュートとして用いられるランプについて、特別な神の恩恵により灯され、我々の精神の中で維持される知性の光であるとし、宗教的文脈から説明がされている。

この意味を踏まえながら、一方で、ラ・トゥールやヘラルト・セーヘルズ (1591-1651) によるマグダラのマリアに描かれるオイルランプは、ガラスの器であることも見逃すことはできないだろう。ガラスのランプは他の聖人図像においては確認することはできない。それに加え先行作品では、隅のほうに控えめに描かれていたランプが、画面の中央に大きく描かれるようになる。先行する図像を踏襲しながらも、新たな表現を加えることでより神秘性を増しているといえる。このような変化の背景にある、照明の光やあるいは夜が担っていた象徴的意味の一端に迫り、それがどのように作品に反映されていたか提示したい。